齋藤史

遠景

近景

齋藤　史（さいとう・ふみ）

歌人。

一九〇九年東京に生まれる。

軍人であった父に従い、旭川市、津市、小倉市、再び旭川市に転住。

福岡県立小倉高等女学校卒。

一九二六年頃より作歌。現在歌誌「原型」主宰。

歌集―『魚歌』ぐろりあ・そさえて刊

『うたのゆくへ』長谷川書房刊

『ひたくれなゐ』不識書院刊　十一回迢空賞受賞

『齋藤史全歌集』大和書房刊他

随筆集『春寒記』乾元社刊

『現代短歌入門』元元社など。

遠景近景

一九八〇年八月一〇日初版発行

著　者　齋藤　史　©1980

発行者　大和岩雄

発行所　大和書房

東京都文京区関口一―三三

郵便番号　一一二

電　話（二〇三）四五一一

振替東京六―六四二二七

装丁者　田村義也

印刷所　信毎書籍印刷

製本所　東京美術紙工

乱丁本・落丁本はお取替えいたします

ISBN4-479-00990-4406

齋屑藤史

遠景

近景

遠景近景　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

遠景近景

老いるということ 8　若山牧水と喜志子 12
太田水穂と四賀光子 18　いなご 22　祖父母 26　馬 30　ことば 34　寄せ書き帳 37
尾山篤二郎と北原白秋 42　むかし—銀座 46
防空服 50　陸軍病院 54　林芙美子のこと 58　背負う 62　食べる 66　戦火 70
信州疎開 74　再び疎開のこと 78　昼寝 82
村のことば 86　地域話 90　はだか火 95
終戦の日 98　ふだん着 102　若者帰る 106
米・塩 110　子鳩 114　美女の評価 118　娯楽 122　若者たち 126　風習 130　生きものたち 134　りんご干し 138　買い出し部隊 142
婚礼(一) 146　婚礼(二) 150　小説 156　けが人 160　小説その後 164　新居 168　犬 172

医院開業 176　アメリカ娘 180　介護者 185
わかれ 190

おやじとわたし—二・二六事件余談

軍人歌人 197　済南事変と退職 202　ねこまた 207　二・二六事件 210　その日 216　その後 222　裁判 226　死刑 227　父の判決 233
当時の瀏のうた抄 237　史のうた抄 239　戦時下 241　死 244

あとがき 248

遠景近景

老いるということ

わたくしの老母、キク。満九十一歳。―両眼失明してから十年余の上に、脳軟化も重なった。長寿とはいっても、とてもおめでとうといえる状態ではない。

始めは、昭和三十八年の緑内障発病。激しい頭痛とめまいのため水も通らず衰弱。脱水症状であろうか幻覚も起きた。危ないようだと東京の甥たちが見舞に来た。すると、いかにも解っているようにあいさつし、命令までするのである。「東鶴賀の家からふとんや蚊帳を運んでおあげなさい―」本人の居るのが東鶴賀で、どこに居るつもりなのかと聞いてみると、「お寺の（松本市）離れ座敷に来て居ります―」さては、そろそろお墓に近いということか、と思ったが、医者の主人と二人、昼夜点滴をしつづけているうちに、快復しはじめて、全く通常にもどった。

からだの立ち直るのを待って、入院、手術。片目はこの時失ったが、特に仕事を持っているわけではなし、一応日常に差し支えはない。しかし、どうせ年齢と共に白内障は進むであろうと、わたくしはひそかに覚悟をした。

秋の紅葉が美しいからと、何気なく外へ誘って、―珍しく車に酔わず、飯綱から戸隠の山

を見て来た——と喜んだのを、外出の最後に、太陽の方向だけがわずかの明るさとなり、やがて視力は全く消えた。手術は無理だという。

それからは、昼夜もなく、上下、左右も区別のない暗黒世界である。老耄の進むのもしかたあるまい。「気力ですよ—」とはげましつづけていたが、昭和四十八年、主人が就寝中に脳血栓を起こし入院、以後、病院と家とに二人の不自由者を抱え、わたくしの日常ともいえない日常がはじまった。

満三年半ののち、衰えて主人は死んだ。口のきけるうちにと自分を見定めて、ねぎらいの言葉を残し、わたくし一人に見守られてしずかに終わった。

そのなきがらに手探りでさわりながら「私もじきに参りますよ」と泣いた時は、まださほどとも見えなかったが、そののち急速に老は進んで、自分の夫劉と、わたくしの夫堯夫と、孫の宣彦のイメエジは、母の中で混交した。劉がつい先ごろ死んだ事になるかと思うと、「これは堯夫さんに聞いて来て—」と言い、「宣ちゃんは小さい子の手を引いて疎開した—」という。宣彦は四歳で堯夫の手につかまって東京を出たのであった。

昭和五十三年夏、もはやからだも丸く縮み、別人というよりも、別ものの風態になった母に、「あのお母様が—」と、以前を知る人は絶句する。

むかし、失業した旗本の奥様が、乳母であったという母に残っているのは、その言葉使いである。呼ぶときは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「どなた様かお目覚めでいらっしゃいますか—」昼夜の別はない。真昼間でも、自分が寝ていれば人も寝ているものと決めている。食べ終わった食器を前にしながら

「わたくしは今日まだ何もいただいては居りません—」

自分の枕をして寝ていながら

「わたくしの枕がございません。頭をのせる枕はどこでございましょうか—」側へ行くまで何十度でも繰り返しているうちに「わたくしの頭がございません。頭はどこでございましょうか—」となったりする。

わたくしの眠りは毎夜長くて二時間毎にとぎれる。小用に呼ばれるからである。調子が狂えば二十分毎に呼び立てる。人の眠りをさまたげることを思いやるような高級な感情は無くなった。耳もほとんどだめ—おそらく「音」として入って来ても、「意味」にならないのではなかろうか。したがって、此方からの言葉は大声で、いやになる程何度も言わなければどかない。それだけでも疲れ果てる。

しかし、これらは人にも話せる程度のこと。老人を世話したことのある人には解るだろう。話しにくい事も多くある。老は幼にかえる。などというのは嘘で、何しろ人生の垢の沁みた上での老耄だ。「老醜」という語はあって、「幼醜」という言葉はない。「恍惚の人」という美化した言い方のようにもいかない。そんなにうっとりなどしていてはくれないのである。

理屈は通じない相手に、神様でないわたくしは、いらいらし、自分のための時間が無いの

に腹をたてて、疲れ過ぎて熱を出し、またあきらめて、命の終わりというものをしっかり見詰め、見送ろうと腹を据えるしかない。これが人間の責任というものなのだろう。

むすめのわたくしが七十歳。つきあいの長い親と子である。

（昭和五十四年記）

若山牧水と喜志子

昭和五十三年の今年は、短歌を近代から現代に橋渡しした歌人らの記念の年らしい。与謝野晶子の生誕百年、没後三十五年。若山牧水の没後五十年。北原白秋の没後三十五年。斎藤茂吉、釈迢空の没後二十五年になる。一つの時代が確実に過去になったとも言えるし、一時の流行の時をすぎて、なお残るべき作品を見直す時期ともいえよう。

わたくしが直接出会って来た先人たちの思い出を書いておこうと思う。わたくしの父、斎藤瀏が佐々木信綱門下で、終生歌を書いた事から、わたくしの歌も父に手引きされたものと思っている方もあるけれども、父は、一度も短歌をつくれと言ったことは無かったし、わたくしの方も、一生歌を書こうとも思っていなかった。そのような女の子に、正面から歌をすすめたのは若山牧水その人であった。

大正十五年秋、私たち一家は北海道旭川市にいた。その父へあてて牧水から手紙がとどき、歌誌「創作」発行その他の借金を返すために揮毫の旅行をするので、よろしく頼む、というのであった。(昔も今も歌誌というのは金銭的に引き合う仕事ではない。すべて仲間の奉仕によって継続してゆくのだが、それでも赤字が積もるのである)それならば旅館でなく、私

共へお泊まり下さいませんかーと父は返事した。もともと牧水と父は若いころ、太田水穂・光子の家で出会ってはいた。（喜志子が信州から出て太田家にいたころである）しかし特に親しいおつきあいがあったわけではなかったのに、飾らない打ち明けた話がうれしくもあったのだろう。何かと用意に取りかかった。

勤務の間に町の有力者や歌人関係を回って、牧水の色紙（しきし）、短冊、半截（はんせつ）の予約を集めるのであったが、陸軍師団参謀長の軍服のままで「やあ」ととびこむので、相手は、短歌とは話がつながりかねた向きもあったらしい。中には「君が代は—」ってのを書いてくれという注文が出て、「いや、牧水という人は、書家ではないのでー」と説明を始める場面もあった。

牧水を囲むもよおしは札幌につづいて旭川はことに好調。講演会、歌会にも多くの人が集まった。このころ、もう牧水の酒は断てないものになっていて、夜も枕元へ一升瓶を置かなければ安心して眠りに入れない。講演の中途でも酒気が切れてくると調子が落ち、口も鈍くなる。ソレッと土瓶に酒を入れ、お茶に見せたものを演壇に運ぶと、一口舌に乗せただけで、たちまち回転が戻り、満場に向かって「何かご質問はありませんか」と胸を張った。

会のあとは我が家で客たちと飲む。興がのると立ち上がって朗詠をする。すこしあごを上げ、眼を閉じて、しずかな美しい調子で、自分でも楽しんでうたった。その後もいろいろな人の朗詠を聞いたが、聞かせようとする意識があったり、ご自分の美声に溺（おぼ）れたり、牧水の、おのずからな歌の美しさとは少々違うようだ。

そのような酒の席がいよいよ賑やかになったさい中に、
「ちょっと—」
と牧水が左右の人々のおしゃべりを押えた。何事かと話を止めると
「聞いてごらん。いま向うの方で話をしている斎藤さんの声ね、うつくしい—低くて美しい声だ—」
言われて人々は急にそちらの方に耳をたてた。
座敷の末席の方で、他の人々と話していた劉は、牧水の囲りが突然しんとなって、自分の方を見ているのに気付くと、話を中断して此方を振り向いた。きょとんとしている。
「いやいや—」何でもない、と牧水は手を振って見せ、あたりはまた元に戻ったが、そのとき、わたくしは騒がしい酒席にまぎれない牧水の神経を見たような気がした。事実、あまりに一同の調子が上ってくると、いつの間にか席から消えている。気付いたわたくしが、奥の部屋をのぞいてみると、一人であぐらを組んで、銚子ひとつと盃ひとつ、膝の前においてゆっくりと飲んでいるのであった。にこにこしながら少し間の悪そうに、
「あのね、ひとやすみ—」
ほんとうは静かなお酒がお好きなのだ—と思ったものである。
若い頃から「旅の歌人」と呼ばれ、時には世間も家も置いて旅にのがれ、喜志子夫人に「汝が夫は家にはおくな旅にあらばいのち光ると人はいへども」と嘆かせた人も、この頃は、身の廻りいっさい夫人にあずけ切って、お酒の量も喜志子が注意をすれば、そこで止める、

喜志子がまた陰に回って細かい心づかいをする—南国人の夫と、万事ひかえ目の信濃人の妻との組み合せを、見事なものと感じながら垣間見た。

もうひとつ、人の会話の〈声〉ということ。自分が話すという事に夢中になって相手の耳を疲れさすような音声態度であってはならないのだ。それは無礼のはじまり—と一生の胸の底にしまいこんだ。わたくしが歌人牧水から教えられたのは、歌に関することだけでは無かったのであった。

この時牧水が、わたくしの家に残したうた五首。戦争にも焼かず、今も二階の床の間にかかっている。

旭川市斎藤氏方滞在中の数首を録す

野葡萄のもみぢの色の深けれやから松もまだ染むとせなくに

柏の木ゆゝしくたてど見てをればこころやはらぐそのかしはの木

こほろぎのなく声すみぬ野葡萄のもみぢの露は散りこぼれつつ

かへり来て入らむとしつつ門さきの辛夷のもみぢ見ればしたしき

時雨るるや君が門なるこぶしの木うす紅葉して散りいそぐなる

揮毫は、毛布をのべて、喜志子夫人が助手。墨をすったり紙を運んだりのお手伝いがわたくし。大き目の筆に墨を含ませて、一字ずつ、丸い字を書いてゆくのだが、半截のときは、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.